

第 3 節 自由記述の分析

1. 各群における自由記述の分析

コア・カリキュラム（以下、コアカリとする）案の群ごとの自由記述を見ると、延べ 128 の具体的な意見が寄せられている。以下、群ごとに自由記述内容を整理し、共通して得られたテーマごとに代表的な意見を自由記述より例示する。

1) 各群の自由記述の分析

I 群 社会福祉学

到達目標：ソーシャルワークを展開するための基盤として、社会福祉学の概念定義、関連する制度政策、歴史事象を説明できる能力を習得する。

この群に対しては 23 名から具体的な意見が寄せられ、次の 3 点にまとめられる。

(1) 前提となる「群」の必要性和教育上の難しさ

ソーシャルワーク教育のコアカリの中に、このような原理的で他群の前提となる内容を扱う「群」を設けることの重要性を指摘する意見が多数みられる。しかしながら、これらの内容を学生に教育する難しさを指摘する意見もみられる。

- ・変化が著しい時だからこそ歴史や原理は重要と考えます。
- ・他群の前提となる内容であるので示されている内容は必要であり非常に妥当であると考えます。
- ・社会福祉を学ぶうえで必要不可欠であると考えます。ただ「制度の概念」の意味内容が良く分かりません。また、あまりに高度な内容になりすぎて、学生がついていけなくなることも考えられますので、学生のレベルを勘案しながら検討する必要があると思います。

(2) 「社会福祉の歴史」を学ぶ意義の重視

社会福祉士養成カリキュラムにおいて歴史が明確に位置付けられておらず、現行制度・サービス理解が中心であるため、制度創出過程を学ぶことで、現行制度に対する変革の視点、運動的視点を養うことができるという意見がみられる。

- ・歴史が疎んじられている現状（国家資格に引っぱられており、暗記物レベルに落ちている←教科書）を打破していただきたい。
- ・歴史を学ぶ意味（意義）に含まれているかと思いますが歴史を学ぶ大々の意味は現在ある制度サービスが創られてきたものであること、それ故に今後、チェンジがあるいは開発が可能という感覚を養い、利用者の真のアドボケートになる意識を養うことにあると思います。

(3)「社会福祉学」の重要性と研究の遅れ

この項目に関しては、学問としての社会福祉を学ぶ重要性を強調する意見が多い。一方で、この群を教育するうえで、社会福祉学の定義や固有性に対する共通見解がないことが課題であるとの指摘もみられる。

- ・現象や制度としての社会福祉ではなく、学問としての社会福祉をしっかりと教育できる内容を確保されることを望む。
- ・社会科学としての社会福祉学の根幹である。
- ・社会福祉学の固有性が不明。
- ・社会福祉の理念や概念について他学問と比較してコアとなるものが提示しにくい。

Ⅱ群 社会福祉専門職の基本に関わる実践能力

到達目標：社会福祉専門職の基本的態度・姿勢（尊厳の尊重、自己決定、社会正義）を理解し、実践を展開できる能力を習得する。

この群には 28 名から多様な意見が寄せられており、次の 3 点にまとめられる。

(1) 人権意識や社会正義は専門職として前提である

Ⅱ群も他群の前提となる内容であり、専門職として基本的人権意識・社会正義に関する項目は非常に重要であるとの意見が多い。一方で、社会福祉学において、それらの概念や具体的内容についての研究が遅れているとの意見も見られる。関連して、この年代の学生たちにこれらの概念や重要性をどう伝えるかという教育課題があるとの指摘もみられる。

- ・社会福祉の仕事は人権擁護をベースとする仕事であるが、一方で、人権侵害の可能性のある職種であることをしっかり意識できる内容を望む。
- ・基本的人権保障と共生原理との関わりの究明が進んでいない点。社会福祉が追求す

べき幸福と正義との関わりについての究明が進んでいない点。

- ・10代後半～20代前半の学生にどのようにすれば上記の内容を身近に感じ、理解できるのか。理想と現実にギャップは感じます。

(2) II群の位置づけめぐる議論 ～価値観か実践能力か～

II群で求めている内容は「実践能力」よりも「価値観」の側面ではないかという指摘や、より臨床的側面について言及すべきとの意見がみられる。

- ・おそらく、II群すべてに含まれていると思うのですが、「価値」の側面を強調された方がいいと感じました。そうするとジェンダーの視点（多様性を認めるという事も含めて）もいれた方がいいと思いました。
- ・人権論的、倫理的側面のみでなく、臨床的側面のコンピテンスやその概念についても言及すべき。

(3) 「能力論」への戸惑い

項目2の③「意思決定の前提としての『能力論』と『能力支援』の意味と方法」における「能力論」「能力支援」という表現に対する疑問が多く見られた。

- ・意思決定の前提としての「能力論」の内容によっては賛成できない。本人の能力の問題だけを取り出し、環境を無視することを前提とした「能力論」には、問題がある。（後略）
- ・（前略）「能力論」「能力支援」の内容を明確にしていきたい。
- ・能力支援は、生活支援もしくは支援にしてはどうかと思います（能力という言葉のインパクトが強いように思います）。

III群 理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力

到達目標：実践モデル、支援の対象レベルの特質、介入レパートリーを理解し、計画的に実践を展開できる能力を習得する。

この群に対しては、18名の自由記述があり、内容は以下の4点にまとめられる。

(1) ソーシャルワーク理論の基本理解の重要性と教育展開上の課題

コアカリとしてソーシャルワークのモデルやアプローチをどこまで教えるか、また実践

力・実行力をどのように教授するかが課題であるとの意見が多数見られる。特に学部レベルでは「基本的理解」の重要性を主張する意見が多い。

- ・ソーシャルワークのモデルや理論、アプローチは何をどこまで扱うのかが課題と考えます。コア・カリキュラムをミニマム・スタンダードととらえるなら、一般的展開モデルにそって、基本に力を入れるべきと考えます。
- ・モデルは大学院レベルかともイメージします。一応基本知識を入れておくことは大切ですが。

(2) 日本の現状や現実的な課題への応用

ソーシャルワークの理論を社会福祉学と合わせて議論することの重要性、理論やモデルを日本の現状や現場実践において活用すること、教授法の課題を指摘する意見が見られる。

- ・社会福祉の原理論とソーシャルワークの理論をバラバラに議論すべきでないと思う。
- ・日本の現状、日本におけるソーシャルワークのあり方を踏まえて教える内容も組み立てられるべきです。

(3) 用語の概念に対する混乱、疑問

ソーシャルワーク一般モデルや一般的展開モデルや実践、アプローチなどの用語の概念に対する混乱、疑問の指摘がある。

- ・1①と1④が同じ「一般的」でちがいがわかりにくい。
- ・1③と④の違いが分からない。3は①～③で身につくのか疑問を感じる。

(4) メゾ・マクロ実践や研究の課題

日本におけるメゾ・マクロレベルの研究や実践の遅れを指摘する意見がある。

- ・対象レベルに対応したソーシャルワークの中でも、メゾ・マクロレベルのソーシャルワークについて、もっと強化する必要があると思います。
- ・メゾ研究が十分でないなかで、特性把握、技術特性を明示できるか疑問。

IV群 多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力

到達目標：多様な問題群及び問題出現の機序、生活概念及びニーズ概念、発達段階を理解し、実践を展開できる能力を習得する。

本項目については、28名のコメントがあり、内容的には以下の3点にまとめられる。

(1) 福祉問題の分類方法についての疑問

項目3と4における福祉問題の分類方法や視点に対する意見、とりわけ「伝統的問題群」と「新問題群」に分類することへの疑問が多数みられる。

- ・「伝統的問題群」と「新問題群」は分けて語るのには難しい面もあると思います。
- ・伝統的問題群と新問題群を分けて学ぶことには疑問が残る。
- ・(項目) 3、4にある「伝統的」「新」という区分けは意味があるのか？IV群の中には、対象論・ニーズ論・問題論が含まれてくると思われるが、その整理がされていない。そのため「項目」間の関係がよくわからない。
- ・問題群を固定し、バラバラに議論すべきでないを考える。ライフサイクル等も含めて見直す必要があると思う。

(2) 教育展開や教育方法上の課題

本群における項目、細項目の多さから、本群の各項目を網羅した教育展開か教育方法の課題や難しさについて指摘する意見が多い。

- ・全ての項目の要素が必要だと考えますが、もう少し枠組みの整理ができないものではないでしょうか。
- ・すべて妥当と考えるが、実際的には実習や演習と…学びの場を提供する必要がある、**teaching method** の検討が必要な領域と考える。
- ・SWになりたいという学生に3、4をどこまで教えるべきか。希望を持てる内容、ある程度人格形成ができていないと、教えるのは困難、この範囲は学部レベルで必要でしょうか？
- ・具体的事例の選定と、授業での展開プロセスが難しい。

(3) 「発達段階への理解」への疑問・指摘

項目2の「人間の発達段階を理解し、それに対応した多様なソーシャルワーク展開能力」という表現に対し、疑問や指摘をする意見がみられる。

- ・画一化された発達概念、標準化された発達段階が、利用者支援の抑圧管理につながっているという世界的な合意に反する視点ではないか。

- ・発達段階での理解は大切であるが、「人生の標準化」となるライフサイクル論はそれのものではなく、そのような捉えかたの問題点を示さないと、それからはずれ大人を差別的にみてしまう。

V 群 実践環境に対応したソーシャルワーク実践能力

到達目標：実践の場の特質、関係する機関・人々との協働に関して理解し、実践を展開できる能力を習得する。

この群に対して、17 名から具体的な意見が挙げられている。それらの主な意見を整理すると、以下の 3 点にまとめられる。

(1) 必要なソーシャルワーク実践能力について

項目 1 の実践の場の理解に関して、地域社会への視点や社会資源の活用や開発、地域組織化、計画策定等、付け加えるべき視点や必要と考える実践能力についての意見が多数ある。

- ・実践の場の理解に関して（種別）だけではなく、「地域社会」に着目する必要があるのではないか。
- ・V 群の中に社会福祉制度などの社会資源を位置づけえた方がよいと思う。
- ・実践環境に対応したソーシャルワーク実践能力に対しては、「地域組織化」や「地域組織のシステム作り」や「システム機能（強）化」等のアクションが必要ではないのか？また「社会資源の開発」に向けての能力向上にもコア・カリキュラムに入れるべきであると考ええる。
- ・他職種・機関の範囲、構造化が必要。「生活関連分野」をどうとらえるか。プランニング（計画策定等）についての項目が必要ではないか。

(2) 現状の実習教育の限界について

この群で目指す実践展開能力の内容や到達目標について、現在の実習時間数や実習内容の限界から見た教育上の課題を指摘する意見がみられる。

- ・（項目）1 については、どの程度の習得を目標とするかによって、実際に実施できるかどうか分かりません。現行の実習時間では十分な教育ができないように感じます。
- ・（項目）2 については、大学生レベルと大学院レベルで分かれていくように思ってい

ます。なかなか理解を得るのは難しい部分もありそうです。迷うところです。

- ・理念的には重要であるが、それを展開する能力の習得となると、実習時間を改める必要もあると考えている。

(3) 表現上の問題への指摘

この群の意図する内容や他群との相違点や整合性についての指摘や、文章表現の理解や解釈にかかわるコメントがいくつかある。

- ・多分、Ⅴ群は実習や相談科目を指していると思いますが、上記のような表現だと、はじめての方には、伝わりにくいと思います。
- ・Ⅲ群とのちがいが不明確。
- ・必要不可欠な項目ですが、内容の吟味が必要であり、Ⅰ～Ⅳ群での学習内容との整合性をとることが求められます。

Ⅵ群 実践の中で研鑽・研究できる能力

到達目標：最善・最新情報収集、自己研鑽、研究等、個人的ソーシャルワーク能力の維持・向上及び、社会福祉学とソーシャルワークの発展に寄与する能力を習得する。

この群に関しては、14名から具体的な記述が得られた。内容を分類すると、以下の2点にまとめられる。

(1) 「自己研鑽・研究能力」の重要性と教育上の課題

項目2「ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め、研究できる能力」については、学校内で身に付けることが重要であり、カリキュラムの充実を望む意見という賛成意見が多くある。しかしそれを実践するための教育の負担の指摘もある。一方、ミニマムとして研究まで必要か、研究・研鑽能力は現場で身に付ければよいとの反対意見も少数だがある。さらにスーパーバイザーの理論と方法を身に付ける必要があるとの指摘もある。

- ・実践の中で、研究できる能力は、学校教育の中で身につける必要があると考えます。そのため卒業論文は大切です。
- ・ソーシャルワーク（ソーシャルワーカー）の評価を高めていくためには必須と考えます。
- ・カリキュラム内容は広範囲にわたり、全体的にカバーできていると思いますが、学

生の学力では教育現場において、教える側の負担が近年大きく感じています。

- ・研究まで必要であろうか（ミニマムとして）それよりもスーパーバイズに関する
ことについて教えなくてよいのだろうか。
- ・現場で身につけるものでもよい。

(2)「情報活用能力」の重要性と課題

項目1「ソーシャルワーク実践に関わる情報活用能力」については、専門職としての資質向上、特に利用者への情報提供、調査研究や地域福祉実践のために必要不可欠な能力であるとの意見が多い。しかしその際個人情報の保護等の倫理的配慮についての教育や、現場実践とのリンクが重要との意見もある。

- ・地域福祉の推進に向けて、情報活用能力は必要であり、分析する力、伝える力が求められているといえる。
- ・今後、情報機器を有効に活用することが必要不可欠であると考えるが、現場とのリンクが課題となっている。
- ・社会福祉の調査や実践においては、多くの個人情報を扱うことになるため、情報への倫理的配慮についての教育が必要と考えられる。

2) まとめと課題

以上、コアカリ(案)のⅠ群からⅥ群まで、各群とその中の項目・細項目に対する自由記述内容を整理し、まとめと典型的な記述内容を例示した。今回取り上げた以外にも少数意見ながら重要な指摘が多々あるが、紙幅の関係上、すべてを例示はしていない。

各群や項目に対する自由記述については、全体的に今回のコアカリ(案)に対する賛成意見が多かったが、中には内容への疑問、過不足について指摘がいくつかある。さらに各項目の重要性は認めるが、実際の教育展開上の難しさや課題を指摘する意見も多くみられる。

また今回の各群の項目内容については、例えばⅡ群の「能力論」についての議論やⅣ群の「発達段階の理解」への指摘のように、その意図することについて十分に伝わらないものや、多様な解釈をされる恐れのある項目があることがわかった。同様に各群の意図する内容や、群の中の項目間の整合性についても現在の表現では分かりにくいものもある。

以上から、各項目や細項目の表現内容についての修正や補足説明によって、よりわかりやすく共通理解が得られるような工夫が必要と考える。

2. コア・カリキュラム全般の自由記述の分析

全体自由記述は 39 名から種々の意見が寄せられている。39 名の内、社会福祉学系教員は、35 名（社会福祉学＋社会福祉学以外の他分野 2 つを背景としている場合も含む）、他分野教員 2 名、記載なし教員 2 名であった。

1) コア・カリキュラムの難易度

コア・カリキュラム（以下、コアカリとする）は、広範で高度、理論に重点を置いた高度な内容になっている、コアカリの項目は妥当で重要との見解がよせられる。一方で、実現可能なミニマム・スタンダードとしてのコアカリやミニマムの条件が必要との意見もある。またコアカリが高度なため学部教育とするには難しい、多人数の養成は困難であるとの指摘や社会的承認と学生の現実を見据えたよいコアカリを期待する意見もみられる。

コアカリの展開に関しては、コアカリのすべてを盛り込むには負担が大きく、コアカリを意識したカリキュラム策定が大切である。実践との関連では、コアカリが高度な内容から福祉現場の実践でどれだけ活用できるのかとの声もある。なお、労働環境の面からコアカリを学んだソーシャルワーカーが社会で活躍できるかどうか不安や心配する声もある。

なお、国家資格者養成との関連がわからないや、国家資格向上との関連で学部レベルのコアカリの再考が必要との意見もみられる。

○下記は自由記述から抽出

- ① 広範で高度、理論に重点を置いた高度な内容になっている。
- ② 項目に関しては、非常に妥当やどれも重要であるがみられる。
- ③ 実現可能なミニマム・スタンダードとしてのコアカリを望むや、（項目など）簡潔なものに整理する、項目を満たすミニマムの条件が必要で精査が必要である。
- ④ ①から高度なため学部レベルの教育は困難ではないか、学部生では難しい。
- ⑤ コアカリをミニマムとするなら多人数の養成は困難である。
- ⑥ コアカリのすべてを盛り込むと科目数が増え、教員、学生ともに負担が多くなるため、コアカリを意識した講義内容の工夫やカリキュラムの策定が大切である。
- ⑦ 高度なため学部レベルの教育では困難という見方があること。
- ⑧ よく練られた項目であるが、大学の自由度も必要

- ⑨ ①から福祉現場での実践においてどれだけ活用できるのか。
- ⑩ 社会的承認と学生の現実を見すえてよいカリキュラムになることを期待する意見
- ⑪ 大変ていねいに取り上げられ整理されている。しかし、これだけのことを学び得たソーシャルワーカーが社会で活躍できるだろうか？労働条件等、働き続けることのできる環境かどうかふり返ると不安、心配せざるをえない。
- ⑫ 大学教育－実習－就職後の再教育がつながる工夫も視野に入れておきたい。（社会福祉士教育もあるがすべてがパスするわけではないので）
- ⑬ 国家資格向上との関連で学部レベルのコアカリの再考が必要になるのではないか。
- ⑭ 国家資格者養成教育との関連をどう理解すればよいのかわからない。

2) ソーシャルワークをめぐる見解

ソーシャルワーク教育が一般化しつつあるが、カタカナの多用については疑問が出されている。社会福祉学を基礎とするソーシャルワークとなぜいかなければならないか、コア・カリキュラム以前の問題が存在するとの指摘がみられる。ソーシャルワーク教育が福祉教育なのかとの意見もみられる。

○下記は自由記述から抽出

- ① 「ソーシャルワーク教育」という用語が一般的になりつつあるが、カタカナの多用は学生が不思議に思うところである。また、「社会福祉学を基礎とするソーシャルワーク」となぜ、いかなければならないのか、コアカリ以前にこの領域の弱さを感じる。
- ② ソーシャルワークにかなり傾斜した印象がある。
- ③ ソーシャルワーク的なものを教育することだけが「福祉教育」ではない。（他分野教員）

3) 教育項目の構成の整合性と内容

(1)教育項目の構成

教育項目の構成の整合性に関しては、群と項目、細項目の範囲が広く相当な量であるとの指摘がなされ、1であげたようなミニマム・スタンダードとの関連づける声もある。しかし、コアカリとして示された項目はどれも重要や、項目の整合性に関しては妥当との見解がみられる。他方、項目間の結びつきや関連性、実践への展開とのつながりを示す必要があるや他項目との重複もあるのではないかと指摘もみられる。

○下記は自由記述から抽出

- ① 構成されている項目は妥当である、項目はどれも重要である。
- ② 全体的に適切な項目が含まれているが個々の内容を吟味する必要がある。
- ③ 群と項目、細項目の範囲が広く相当な量である。
- ④ 各群・項目との結びつき、関連性や実践への展開とのつながりを示す必要がある。
- ⑤ 他項目との重複があるのではないか。

(2)教育項目の内容について

教育項目の内容についても下記のような種々の意見が寄せられている。ソーシャルワーク教育については重要な点が盛り込まれていること、ただ、その内容には旧分類が残っているや学問的に合意をみていない項目については精査を求める意見もみられる。内容に関しては、価値、思想や倫理を意識的にとりあげたらどうかといった提案、社会変化に伴い必要な視点が入っているとの見解やジェンダーの視点が必要との指摘、マクロ的な面の弱さ・少なさを指摘するもの、他職種との比較・重複部分とソーシャルワークの独自に発揮する部分の検討を期待する意見、福祉専門職論の重要性、教育年限との関連からの不安とともに、達成度を評価する視点や実態調査に関する意見がみられる。以上のような指摘、意見や提案は、教育項目が即授業科目と結びつけられる面を示している。

○下記は自由記述から抽出

- ① ソーシャルワーク教育は重要な点がカバーされている。
- ② ソーシャルワーカーとしての実践力とそれを支える、価値・倫理・理論をしっかり学ぶことを中心に、カリキュラムが組立てられることが重要であり、実習の充実とその後の学習が大切（これをくり返すこと）である。
- ③ 技術系の内容に旧の技術分類が残っている。整理した方がよい。
- ④ 学問的に合意に至っていない項目については精査を求める意見がある。
- ⑤ 学部レベルで教えるのは難しい項目も含まれている。
- ⑥ 価値、思想や倫理を意識的に前面に出したらどうか。また、ジェンダーの視点が必要。
- ⑦ 社会変化に伴い必要になってきた視点が入っている。
- ⑧ マクロ的なカリキュラムの弱さ・少なさがある。

- ⑨ 他職種の専門性、責務としての能力の比較・重複部分、ソーシャルワークの独自に発揮する部分の検討を期待。
- ⑩ 専門職の概念だけではなく、福祉専門職論をきちんと教えるべき。
- ⑪ 教育内容の必要性、妥当性は感じるが、教育年限（短大部は２年）を考えると、充実した科目構成、授業内容が量・質共に確保できるかは不安。到達過程とその教育内容だけでなく、その達成度評価の視点や実態調査も必要である。
- ⑫ 支援の対象となる問題は多様化し、様々な新問題群の理解と対応方法を学ぶことは重要。伝統的問題群と分けて整理された点は良い。
- ⑬ 年金、医療介護などの制度もきちんと含まれているという理解でよいかとの質問。

(3)教育項目と習得方法・授業形態（講義・演習・実習）との関連：

コアカリのなかで、講義、演習、実習がどのように位置づくのかわかりにくさを指摘する声や、演習や実習の習得方法に関する提案がみられる。また、知識の伝達量やレベルなどに関する意見もみられる。

○下記は自由記述から抽出

- ① 実習、演習、講義の分野論のコアカリ上の位置づけにわかりにくさがある。
- ② コアカリは妥当。実践の経験を通して学びうるので演習・実習の **reflective learning** をとりいれた **teaching method** の検討を要する。
- ③ 項目をどう学び、身につけるかというレベルが重要
- ④ ほとんどの項目が必要。どの程度まで伝える必要があるのか、課題である。

4) アンケートの質問に関する指摘ほか

アンケート調査における従来の科目とコアカリとの関連がわからなかった、やコアカリの枠組み、項目の組み立てがよくわからなかったとする意見、質問の意味が抽象的すぎてわからないなどの意見もみられる。

○下記は自由記述から抽出

- ① 従来の科目とコアカリの関係性について提示があればよかった。
- ② 項目の内容が妥当であるか判断しにくい。キーワードで示す方が判断しやすい。

- ③ 全体の枠組がよくわからない。項目の組立てについても理解しにくかった。
- ④ 項目の個別理解の格差があるのではないか。
- ⑤ 質問の意味が抽象的すぎて理解できない（他分野教員）
- ⑥ ⑦ アンケートにどのような意味があるのか

全体の自由記述では、以上のような意見等が寄せられた。調査結果では、すべての群、中項目、細項目で妥当性が高いとした教員も自由回答では、種々の危惧や不安・心配を示す面もあるが、多様で積極的な意見を寄せている。全体記述と各項目群に記述した教員はおおむねオーバーラップしていることから、コア・カリキュラムに対する意識が高いことがうかがえる。

しかし、寄せられた意見からは、「コア・カリキュラム」構想に関する周知と理解をめぐる課題があることがうかがえる。特に、教育目標の設定、最低限の教育内容の枠組みと項目設定（ミニマム・スタンダード）が、ある特定の授業科目とその内容、講義、演習、実習といった授業形態に結びつきやすいのかもしれない。これらについては、今後、コア・カリキュラムが具体的にはどのような科目と結びつくのか、具体的で例示的なモデルを示すことが必要かもしれない。また、項目に対する意見の違いについても、精査し、検討を要することが求められよう。

第4節 考察

1. これまでのコア・カリキュラム調査の経過と本調査の意義

本調査の意義について、日本社会福祉教育学校連盟の中に設置された社会福祉専門教育委員会が、学校連盟が目指す「コア・カリキュラム」について、2003年度から2011年度まで議論してきた事柄を踏まえ、以下述べてみたい。我が国において、社会福祉教育が行われるようになった歴史はながく、その実績は多く語られ、評価されてきた。

ここでは、社会福祉教育学校連盟に所属する教育機関において教育を受け、その後、学校を卒業した学生がどのような分野に就職したか、毎年調査し記録してきた。それらのデータを積み重ねることで、データから読み取れる現在の社会福祉教育の実績と評価を推定することができるようになってきた。

過去、10年、あるいは15年間、社会福祉教育は、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士等の国家資格取得のための養成を行う教育・訓練を行う養成校とともに、4年制大学、短期大学、専門学校、その他の教育機関において、量的に拡大し、質的にも充実してきたと推測できる。その間、社会福祉とその専門職としての教育・訓練を受け巣立っていった学生は相当な数になる。その教育・養成を行う教育機関での“出口”での継続した調査は、意義深いものがあると考えられる。調査内容は、「社会福祉系学部・学科卒業生の進路等調査」において、「進路種別」、そして、その種別の「就職数（人）」が調査された。その「進路種別」は以下のように分類されている。

以上の項目をあらためてふり返ってみると、社会福祉教育（機関）からの“出口”は、我が国の社会福祉制度、あるいは医療制度の中の“専門職”としての“就職”として考えられてきたことが、伺える。つまり、我が国の社会福祉や医療の制度に枠づけられた“分野”への“専門職”としての就職（数）を調査してきたということになるだろう。ということは、我が国における社会福祉教育・養成が、我が国の制度やその分野によって枠づけられ、それに則って教育内容や科目が導入されてきたともいえるかもしれない。

現在の我が国の社会の要請に応じた教育であり、その専門職の養成を行うことは大切なことであり、教育する者としても顧慮しなければならないことであろう。しかし同時に、このような社会からの要請としてのマン・パワーの必要に応じた学生の教育・訓練の必要性とともに、もう一度、「社会福祉教育とは何か」をあらためて考えていくときがやってき

ているのではないであろうか。

I. 福祉系	
1.	生活保護施設・事業
2.	老人施設・事業
3.	身体障害者構成援護施設・事業
4.	児童福祉施設・事業
5.	知的障害者援護施設・事業
6.	学校等教育施設・事業（スクールソーシャルワーク等）
7.	社会福祉協議会
8.	社会福祉関連団体
9.	その他
II. 医療系	
III. 教員	
IV. 進学	

社会福祉専門教育委員会は、学校連盟として、「社会福祉学を基礎としたソーシャルワーク教育」つまり、その“専門教育（プロフェッショナル・エデュケーション）”としての「コア・カリキュラム」について、継続して議論し、総会等でもその内容を提示してきた。すこし使い古された言葉となっはいるが、もう一度、教育者としての「教育の自由」、「研究の自由」に基づいた、我が国のことともに、グローバルに開かれた「これからの社会福祉、あるいはソーシャルワークとは何か、その教育とは何か」をあらためて考え、学生への教育を実践していかなければならないときにきているのではないであろうか。

コア・カリキュラムに関するこれまでの調査の経過と、今回の調査をふり返り、もう一度初心にかえって、「教育者として、これからの社会福祉教育、ソーシャルワーク教育はどうあるべきか」を、自らが問い直すための参考となるものになれば、この調査の意義はより大きなものになるであろう。

2. 本調査全体の考察

ここでは本調査全体の考察として、まず本調査結果について確認する。次に、調査結果の中から生まれてきた検討課題を整理し、それに対する若干の考察を行う。

1) 調査結果の確認

本調査結果は、第2節において、①コア・カリキュラム（案）に対する妥当性得点、②属性・背景特性と妥当性得点の関連、③項目間の相関について、そして第3節において、④コアカリキュラムの全体自由記述についてまとめられている。それぞれの記述内容には、考察部分が含まれているので、その点を踏まえて整理する。

① コア・カリキュラム（案）に対する妥当性得点

すべての群・中項目・細項目において平均得点は4点以上で、いくつかの項目を除いて、その得点は天井効果を示した。回答分布をみると、ほとんどの細項目において、「非常に妥当である」および「まあ妥当である」の回答が80%以上であった。したがってコア・カリキュラム（案）の群・中項目・細項目の内容的妥当性は確認された。

② 属性・背景特性と妥当性得点の関連

各群の表す内容の関連教育科目に携わっている教員、および社会福祉学を学問的背景に有する教員は、関与度の高さから一貫して妥当性の高い評価を示すことが予想されたが、多くの群・項目・細項目は、回答者の属性や背景特性に関係なく妥当性が評価された。ただし特定の教員が一部の項目について、妥当性を相対的に低く評価しているところもあった。

①②の結果に基づく考察

以下の5項目が提示されている。

1. 項目精選の必要性和注目すべき項目の提案（相対的に妥当性の評価が低かった項目、および属性や背景特性によって妥当性評価に差が認められた項目）
2. コア・カリキュラム（案）の構成概念妥当性の検討
3. コア・カリキュラム（案）の基準関連妥当性の検討
4. コア・カリキュラム（案）有用性の検証
5. コア・カリキュラムを教育実践に関するガイドライン等の作成

③項目間の相関について

項目間の全体的な関係性を調べるために、コア・カリキュラム（案）の全項目についての相関を調べてみたところ、全相関係数の平均値は $r=.572$ であり、全体として非常に高い相関を示した。次に全項目の相関では、項目間の全体の構造をつかみにくいため、各中間項目（18項目）に含まれる下位項目の平均得点を中間項目の得点として、中間項目間の相関関係を調べてみたところ、「中間項目の相関（ $r>.7$ ）」からは、Ⅰ群とⅡ群、Ⅱ群とⅢ群、Ⅳ群とⅤ群の間に、相対的に強い相関を読み取ることができた。

以上のような、項目間の相関及び中間項目間の相関状況は、内容が非常に近い項目が存在するか、または、明確に区分することが困難な複数の項目が存在する可能性を示唆した。

③の結果に基づく今後の課題

コア・カリキュラム（案）には、各項目の妥当性は確認されたものの、構成概念妥当性については、若干の課題があるとして以下の3点が挙げられている。

1. 相関係数が $r=.9$ 以上の項目をどのように取り扱うか。
2. <Ⅰ群とⅡ群><Ⅱ群とⅢ群><Ⅳ群とⅤ群>における中間項目間の高い相関の存在にどのように対処するか。
3. 6群による分類よりも、4群による分類の方が「コア・カリキュラムの評価モデル」としての適合度指数が高くなることをどのように解釈するか。

④コア・カリキュラムの自由記述について

コア・カリキュラムの自由記述については、①コア・カリキュラム全般について、②ソーシャルワークをめぐる見解、③教育項目の構成の整合性と内容について、④教育項目と習得方法・授業形態（講義・演習・実習）との関連、⑤アンケートの質問に関する指摘、に区分され、どのような自由記述内容があったかを整理している。

例えば、①コア・カリキュラム全般については、実現可能なミニマム・スタンダードとしてのコアカリやミニマムの条件の必要性が指摘されている。②ソーシャルワークをめぐる見解としては、「社会福祉学を基礎とするソーシャルワーク」となぜ言わなければならないかという基本的な指摘がある。また③教育項目の構成の整合性と内容については、教育項目の構成として、群と項目、細項目の範囲が広く相当な量であるとの指摘、項目間の結びつきや関連性、実践への展開とのつながりを示す必要がある、あるいは他項目との重複もあるのではないかという指摘がある。さらに教育項目の内容についてのそれぞれの立場

から要望が述べられている。④教育項目と習得方法・授業形態（講義・演習・実習）との関連では、コア・カリキュラムのなかで、講義、演習、実習がどのように位置づけるのかという指摘、演習や実習の習得方法に関する提案がある。⑤アンケートの質問に関する指摘として、コア・カリキュラムの枠組み、項目の組み立てがよくわからないという意見がある。

④のまとめ

これらの結果に基づく今後の課題として、第3節の最後に以下の点が挙げられている。

1. 「コア・カリキュラム」構想に関する周知と理解をめぐる課題

(1) 教育目標の設定

(2) 最低限の教育内容の枠組みと項目設定（ミニマム・スタンダード）

(3) コア・カリキュラムと具体的科目の結びつきを示す例示的モデルの提示

2. 項目に対する意見の違いについての精査・検討

以上が考察部分を含むそれぞれ結果である。

2) 検討課題の整理と考察

第2節から抽出される検討課題と、第3節から抽出される検討課題を整理・照合することによって本調査全体の検討課題が明らかになるものと思われる。表1はそれぞれの検討課題を一覧にしたものである。

表1に示した検討課題を見ると、コア・カリキュラム（案）について、「コア・カリキュラム」構想とこれまでの議論の経過の周知と理解を求めることが先決のようである。次に、コア・カリキュラム（案）の項目精選の必要性和、同時に、コア・カリキュラム（案）の構成概念妥当性の検討、基準関連妥当性の検討、有用性の検証、教育実践としてのガイドライン作成等が課題として挙げられよう。たぶん、この過程で、第3節の1(1)教育目標の設定、(2)最低限の教育内容の枠組みと項目設定（ミニマム・スタンダード）、(3)コア・カリキュラムと具体的科目の結びつきを示す例示的モデルの提示は可能になると思われる。

そこで、①コア・カリキュラム（案）についての周知と理解、②コア・カリキュラム（案）の項目精選の必要性、③コアカリキュム（案）について総合的な検討（構成概念妥当性の検討、基準関連妥当性の検討、有用性の検証、教育実践としてのガイドライン作成）を課題として位置づけ若干の考察を述べる。

表 1:2 節・3 節から抽出された検討課題群

	第 2 節	第 3 節
検 討 課 題	1. 項目精選の必要性和注目すべき項目の提案 2. コア・カリキュラム（案）の構成概念妥当性の検討 3. コア・カリキュラム（案）の基準関連妥当性の検討 4. コア・カリキュラム（案）有用性の検証 5. コア・カリキュラムを教育実践に関するガイドライン等の作成	1. 「コア・カリキュラム」構想に関する周知と理解をめぐる課題 (1) 教育目標の設定 (2) 最低限の教育内容の枠組みと項目設定（ミニマム・スタンダード） (3) コア・カリキュラムと具体的科目の結びつきを示す例示的モデルの提示 2. 項目に対する意見の違いについての精査・検討

※コア・カリキュラム（案）の構成概念妥当性の具体的な検討課題は「③項目間の相関」を参照のこと。

①コア・カリキュラム（案）についての周知と理解

この点は、実は、「コア・キュラム」構想当初から気になっていた点である。我々、社会福祉専門教育員会は、社会福祉教育セミナーの場を活用し、2008 年、2010 年と研究成果を報告し、また関連する資料等を公開してきた。しかし、それに対して、関係者がどの程度の関心を持っていたかは定かではなかった。今回の調査によってその点が改めてクローズアップされた以上、「コア・カリキュラム」構想を進めていくのであれば、これまでに以上に、周知と理解をはかる場と機会を用意していかなければならないだろう。

例えば学校連盟の各地域ブロックにおいて説明会を開催するというような企画が有効だと思われる。また一步踏み込んで、学校連盟が予定している認証評価事業（アクレディテーション）と合わせてコア・カリキュラムに関する説明会を開催するのも有効であろう。

②コア・カリキュラム（案）の項目精選の必要性

今回の調査結果では、項目全体について一定の妥当性は担保されたが、特定の項目については再検討しなければならないものもある。また構成概念妥当性の観点からは、いくつかの検討課題が出されている。さらに自由記載との関連で、教育目標の設定やミニマム・スタンダードの設定、さらにコア・カリキュラムと具体的科目の結びつきを示す例示的モ

デルの提示の必要性が指摘されている。

これらの課題を総合的に議論し、現行のコア・カリキュラム（案）を、いつまでに、どの程度の修正を加えるのか、さらにどのような関連資料を用意するのかということを決めなければならないのではないだろうか。また視点を変えるならば、コア・カリキュラム（案）の完成度をどのように考えるかということについても議論する必要があると思われる。なぜなら、完成度の水準をどこに求めるかによって修正作業の質は異なることが予想されるからである。

項目の精選はある意味ではきりが無いし、教育目標の設定やミニマム・スタンダードの設定という議論も、コア・カリキュラムの中で最低限これだけは確保しようということになれば、それこそ、コア・カリキュラムとの位置関係が混乱することが予想される。

今回の調査結果を受けて、改めて「コア・カリキュラム」構想の枠組みを確認し、どの程度の修正を加えるかを確定したうえで、すみやかに修正作業に入ることが求められる。

またコア・カリキュラムと具体的科目の結びつきを示す例示的モデルの提示については、すでに 2009 年度社会福祉教育セミナーの当日配布資料の中に「社会福祉学コア・カリキュラム新構想－A 大学社会福祉学科 2009 年度シラバスの検討を通じて－」がある。これは当時の社会福祉専門教育委員会が試行したものであるが、このような例示的モデルをよりわかりやすいものに加工し周知していくことが求められているのであろう。

③コアカリキュラム（案）についての総合的な検討（構成概念妥当性の検討、基準関連妥当性の検討、有用性の検証、教育実践としてのガイドライン作成）

②のコア・カリキュラム（案）の項目精選の必要性は、要するに一定の条件下における現行のコアカリキュラム（案）の修正作業を意味している。その作業をいつまでに行うかということと並行して、修正されたコア・カリキュラム（案）についての総合的な検討として、項目妥当性、構成概念妥当性、基準関連妥当性、さらに有用性の検証をどのように行っていくのかという「コア・カリキュラムの検討作業計画」を策定しなければならないだろう。また教育実践としてのコア・カリキュラムを活用するガイドラインの作成など、実際の活用方法や手順書等を整備していくことも求められる。

以上述べてきたことを要約すると、「コア・カリキュラム構想の周知と理解の方法の検討」、「現行コア・カリキュラム（案）の修正作業の実施」、そして「今後のコア・カリキュラム検討の枠組みづくり」が当面の課題であるといえよう。

第5節 今後の課題と展望

本年度社会福祉教育専門委員会では、日本社会福祉教育学校連盟が取り組んできたコア・カリキュラム（案）策定成果のもとに、コア・カリキュラムの国内調査と国際調査を実施した。特に、国内調査においては、コア・カリキュラム（案）6群18項目の妥当性の検証を行なった。今回の調査結果からは、妥当性は保たれていることが認められ、若干の課題を含むものの、大きく変える必要はないと判断される。

以下に、今後の課題と展望を示す。

第1に、これまでコア・カリキュラムの開発に取り組んできた社会福祉専門教育委員会の成果をもとに、より妥当性の高いモデルとなるよう精査を加え、その上で、わが国の「社会福祉学を基礎としたソーシャルワーク教育」を確定していくことが急務である。今回の調査は項目の妥当性に焦点を当てたが、今後は、日本社会福祉教育学校連盟の会員校の協力を得て、実際の教育現場における実施状況の検証を行うことが課題である。

第2に、今回のコア・カリキュラムは、学部を対象としているが、大学院教育レベルでのコア・カリキュラムを確定し、重層化したものとしていくことが必要である。今日の複合的で深刻な生活困難事象に対しては、ミクロ、メゾ、マクロ領域にわたり積極的に関与し、解決・緩和・予防レベルまでを包含する多次元的な機能・方法を駆使するソーシャルワークの実践知が不可欠である。また、ソーシャルワークは、従来社会福祉の領域で扱ってきた生活課題を超えて展開されてきている。さらに、社会構造的に人々に起きる待ったなしの生活課題にアドボケイトし、現実的に即応していく手法をとる介入する対象は変化しやすいし、そこで活用される手法も多次元的になる。このような高度な課題に応じることができる人材育成を考慮すると、コア・カリキュラムについては、学部教育のレベルのみならず大学院教育のレベルを含めた二層化が不可欠となる。加えて、その後のキャリア教育ないし研修教育なども関連づけた第三層も視野におくことが必要になるとおもわれる。

第3に、ソーシャルワークのグローバル・スタンダードがわが国の社会福祉教育に与える影響は指摘されてきたが、日本社会福祉教育学校連盟として、今まで以上にその設定に関して、建設的な貢献をすることが課題である。本研究においては、わが国におけるコア・カリキュラムを明確化してきたが、それらを諸外国に紹介・提示し、国際的なグローバル・スタンダードの討議に寄与することが望まれる。

第4に、本調査では、社会福祉学という学術的なレベルの課題や、社会福祉学とソーシャルワークとの位置関係や相互関係についての学術的な課題も指摘されている。社会福祉の領域から生まれてきたソーシャルワークという実践科学あるいは実践の学として、どのような教育をめざすのかという点において、学校連盟として学会・専門職団体とさらなる協働を推進していくことができると考える。

「社会福祉を基礎とするソーシャルワーク教育コア・カリキュラム（案）」 に対する教員の認識把握調査

（文部科学省先導的大学改革推進委託事業研究）

謹啓

時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。社団法人日本社会福祉教育学校連盟会員校の教員の皆さまには、日頃、社会福祉教育の推進に向けた取り組みにご尽力頂き、心より御礼申し上げます。

さて、日本社会福祉教育学校連盟では 2005 年度より社会福祉専門教育のコア・カリキュラムの策定に向けた取り組みを行っており、2010 年度には文部科学省の委託を受けて、「社会福祉を基礎とするソーシャルワーク教育のコア・カリキュラム（案）」を作成しました。この“コア・カリキュラム”は、社会福祉教育学校連盟に加盟する学校に共通して求められる教育目標とその到達過程としての教育項目のミニマム・スタンダード，すなわち学校側が最低限抑えるべき教育内容を指します（資格試験のための授業科目ではありません）。

2011 年度は本案の妥当性検討と項目精選を行います。そのために会員校の教員の皆さまから、コア・カリキュラム（案）の各項目の妥当性の評価、およびコア・カリキュラムに対するご意見を頂きたく、学校連盟加盟校の福祉系科目を担当されている教員を対象に本調査を実施する運びとなりました。本調査は無記名で行い、結果公表の際にも個別の回答を扱うことはありません。また、調査目的以外では一切使用致しません。

本調査へのご協力は任意ですが、本調査の趣旨を御理解頂き、有用なコア・カリキュラムにするために、是非ご協力頂けますようお願い申し上げます。

謹白

平成 23 年 11 月吉日

社団法人 日本社会福祉教育学校連盟
会長 高橋重宏（日本社会事業大学教授）
社会福祉専門教育委員会
委員長 野村 豊子（東洋大学教授）

【お問い合わせ先】

日本社会福祉教育学校連盟 事務局
電話：03－5366－5964
E-mail：grenmei@jassw.jp

A. 回答者の基本属性について

1. 所属機関名	
2. 所属学部等名	
3. 担当している資格養成 (該当するもの全てに○を付けて下さい)	1) 社会福祉士 4) 保育士 2) 精神保健福祉士 5) 1) ～4) のいずれも 3) 介護福祉士 担当していない
4. 社会福祉関連科目担当歴 (2011年3月までの時点)	年
5. 学問的背景 (該当するもの全てに○を付けて下さい)	1) 社会福祉学 5) 心理学 2) 医学 6) 保健学 3) 看護学 7) その他 4) 介護学 ()
6. 保有資格の状況 (該当するもの全てに○を付けて下さい)	1) 社会福祉士 5) 医師 2) 精神保健福祉士 6) 看護師 3) 介護福祉士 7) その他 () 4) 保育士 8) なし
7. 大学院担当の有無	1) 大学院担当あり 2) 大学院担当なし

- コア・カリキュラムは、群（Ⅰ～Ⅵ）－項目－中項目の層で構成されます（群と項目は下表参照）。Ⅰ群は基盤となる社会福祉学に関する項目、Ⅱ～Ⅵ群は、ソーシャルワーク専門職としての実践を展開できる能力を示す項目で構成されています。
- 次ページから妥当性をお伺いするコア・カリキュラムの内容は「項目」および「中項目」を表しています。各項目の内容をよりご理解頂けるように、別紙で各項目を詳細に説明していますので、別紙を参照頂きながらご回答ください。

群	項目
Ⅰ群：社会福祉学	1. 社会福祉概念の定義・内包・外延およびその概念に関する理論的立場を表示するもの、2. 社会福祉制度・政策領域、3. 社会福祉の歴史
Ⅱ群：社会福祉専門職の 基本に関わる実践能力	1. 人の尊厳と人権擁護を基本に据えた実践能力、2. 利用者の意思決定を支援する実践能力、3. 社会正義に基づいて広範な視野を有する実践能力
Ⅲ群：理論的・計画的な ソーシャルワークの展開能力	1. ソーシャルワークの理論やソーシャルワーク実践モデルを駆使したソーシャルワーク展開能力、2. 対象のレベル（個人・家族・集団・組織・地域・制度など）に対応したソーシャルワーク実践能力、3. ソーシャルワーク基本技術群及び多様な介入レパートリーを有した確実な実践能力
Ⅳ群：多様な利用者への ソーシャルワークの展開能力	1. 社会福祉の対象とその変化に対応したソーシャルワーク展開能力、2. 人間の発達段階を理解しそれに対応した多様なソーシャルワーク展開能力、3. 問題群に対応した多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力、4. 対象が生み出される仕組みへの理解に基づく、利用者に適した理論的アプローチによるソーシャルワーク展開能力、5. 多様な生活の場に対応したSW展開能力
Ⅴ群：実践環境に対応した ソーシャルワークの展開能力	1. 多様な実践の場の理解と場にふさわしいソーシャルワーク実践能力 2. 他職種・機関と連携できるソーシャルワーク展開能力
Ⅵ群：実践の中で研鑽・研究 できる能力	1. ソーシャルワーク実践に関わる情報活用能力 2. ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め、研究できる能力

B. コア・カリキュラム（案）の妥当性について

以下は、「コア・カリキュラム」の項目として、日本社会福祉教育学校連盟が作成しているものです。コア・カリキュラムにこれらの項目を位置づけることの妥当性について、どのように考えますか。もっとも近い数字を選んで、○をつけてください。

※ 回答は、項目（1, 2…）および中項目（①, ②…）のそれぞれについてお願い致します。

I 群 社会福祉学

【I 群の到達目標】 ソーシャルワークを展開するための基盤として、社会福祉学の概念定義、関連する制度政策、歴史事象を説明できる能力を習得する。	全く妥当ではない	あまり妥当ではない	どちらとも言えない	まあ妥当である	非常に妥当である
1. 社会福祉概念の定義・内包・外延およびその概念に関する理論的立場を表示するもの	1	2	3	4	5
① 社会福祉の理念	1	2	3	4	5
② 社会保障・社会福祉の位置づけ	1	2	3	4	5
③ 社会福祉学一般理論・原理論	1	2	3	4	5
④ 社会福祉の主要概念	1	2	3	4	5
⑤ 社会福祉における実践主体	1	2	3	4	5
2. 社会福祉制度・政策領域	1	2	3	4	5
① 社会福祉制度の概念	1	2	3	4	5
② 社会福祉関連法	1	2	3	4	5
③ 社会福祉制度を生み出す仕組み・要因	1	2	3	4	5
④ 非公的セクターの意義と仕組み及び機能	1	2	3	4	5
⑤ 国際的側面（国内社会保・社会福祉への影響要因）	1	2	3	4	5
3. 社会福祉の歴史	1	2	3	4	5
① 社会福祉において「歴史」を学ぶ意義の把握	1	2	3	4	5
② 現代の社会福祉を理解・把握するための視点からの逆照射	1	2	3	4	5
③ 語られる（記述される）歴史の側面	1	2	3	4	5
④ 歴史における比較の視点（日本と諸外国）	1	2	3	4	5

附問 1：現在，I 群が表す内容の関連科目教育に携わっていますか？

→ 1) 携わっている 2) 携わっていない

附問 2: I 群の項目のコア・カリキュラムとしての妥当性についてご意見を自由にお書き下さい。

--

Ⅱ 群 社会福祉専門職の基本に関わる実践能力

【Ⅱ群の到達目標】 社会福祉専門職の基本的態度・姿勢（尊厳の尊重、自己決定、社会正義）を理解し、実践を展開できる能力を習得する。	全く妥当ではない	あまり妥当ではない	どちらとも言えない	まあ妥当である	非常に妥当である
1. 人の尊厳と人権擁護を基本に据えた実践 能力	1	2	3	4	5
① 基本的人権概念の把握	1	2	3	4	5
② 人権侵害概念と侵害状況の把握	1	2	3	4	5
③ 人権擁護概念と擁護方法の把握	1	2	3	4	5
2. 利用者の意思決定を支援する実践能力	1	2	3	4	5
① 利用者の意思決定という概念の意味と意義の理解	1	2	3	4	5
② 権利としての意思決定の法的、倫理的根拠	1	2	3	4	5
③ 意思決定の前提としての「能力論」と能力支援の意味と方法	1	2	3	4	5
3. 社会正義に基づいて広範な視野を有する実践能力	1	2	3	4	5
① 正義及び社会正義の概念の把握	1	2	3	4	5
② 正義の下位概念の把握：自由・平等に関する理解	1	2	3	4	5
③ 反正義状況の把握（世界の悲惨）	1	2	3	4	5

附問 1：現在，Ⅱ群が表す内容の関連科目教育に携わっていますか？

→ 1) 携わっている 2) 携わっていない

附問 2: Ⅱ群の項目のコア・カリキュラムとしての妥当性についてご意見を自由にお書き下さい。

--

Ⅲ群 理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力

【Ⅲ群の到達目標】 実践モデル、支援の対象レベルの特質、介入レパートリー を理解し、計画的に実践を展開できる能力を習得する。	全く 妥当では ない	あまり 妥当では ない	どちら とも言え ない	まあ 妥当であ る	非常 に妥当 である
1. ソーシャルワークの理論やソーシャルワーク実践モデルを 駆使したソーシャルワーク展開能力	1	2	3	4	5
① ソーシャルワークの一般モデル	1	2	3	4	5
② ソーシャルワーク理論の歴史	1	2	3	4	5
③ ソーシャルワークの実践モデル／アプローチ	1	2	3	4	5
④ ソーシャルワークの一般的展開（過程）モデル	1	2	3	4	5
2. 対象のレベル（個人・家族・集団・組織・地域・制度など に対応したソーシャルワーク実践能力	1	2	3	4	5
① ソーシャルワークの対象レベルの捉え方：マイクロ-メゾ-マクロ	1	2	3	4	5
② 各レベルの対象特性の把握	1	2	3	4	5
③ レベル特性に対応するソーシャルワーク技術特性の把握	1	2	3	4	5
3. ソーシャルワーク基本技術群及び多様な 介入レパートリーを有した確実な実践能力	1	2	3	4	5
① ソーシャルワークの基本技術の把握と実行力	1	2	3	4	5
② ソーシャルワークの「方法」概念	1	2	3	4	5
③ 関連技術群の把握と実行力	1	2	3	4	5

附問 1：現在、Ⅲ群が表す内容の関連科目教育に携わっていますか？

→ 1) 携わっている 2) 携わっていない

附問 2：Ⅲ群の項目のコア・カリキュラムとしての妥当性についてご意見を自由にお書き下さい。

Ⅳ群 多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力

【Ⅳ群の到達目標】 多様な問題群及び問題出現の機序、生活概念及びニーズ概念、発達段階を理解し、実践を展開できる能力を習得する。	全く妥当ではない	あまり妥当ではない	どちらとも言えない	まあ妥当である	非常に妥当である
1. 社会福祉の対象 とその変化に対応したソーシャルワーク展開能力	1	2	3	4	5
① 社会福祉における対象の理解	1	2	3	4	5
② 対象の変遷への理解	1	2	3	4	5
③ 時代区分と対象論	1	2	3	4	5
④ 福祉制度論と「対象論」の位置関係の把握	1	2	3	4	5
2. 人間の発達段階を理解しそれに対応した多様なソーシャルワーク展開能力	1	2	3	4	5
① ライフサイクル・ライフコース・ライフステージ・生涯発達等の概念の把握	1	2	3	4	5
② 発達課題・生活課題概念と、課題分析の方法と理解	1	2	3	4	5
③ ライフイベント概念の把握	1	2	3	4	5
3. 問題群に対応した多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力	1	2	3	4	5
① 伝統的問題群（貧困・疾病・家族関係・扶養・ケア・住宅・生活環境等々）の理解と対応法（対応制度も含む）の把握	1	2	3	4	5
② 新問題群（労働・格差・犯罪・虐待・多文化・多人種等々）の理解と対応法（対応制度も含む）の把握	1	2	3	4	5
4. 対象が生み出される仕組みへの理解に基づく、利用者に適した理論的アプローチによるソーシャルワーク展開能力	1	2	3	4	5
① 支援の対象となる分野（問題群）を理解する	1	2	3	4	5
② 伝統的問題群（貧困・疾病・家族関係・扶養・ケア・住宅・生活環境等々）および新問題群（労働・格差・犯罪・虐待・多文化・多人種等々）にある利用者に対応するための理論的アプローチの把握。	1	2	3	4	5
③ 社会福祉における利用者および対象認識	1	2	3	4	5
5. 多様な生活の場に対応した SW 展開能力	1	2	3	4	5
① 生活における居住環境と各環境の生活の構造の把握	1	2	3	4	5
② 生活における転居・移動・移行の概念と実態の把握	1	2	3	4	5
③ 生活の場（地域・在宅・施設・中間形態）に応じたソーシャルワークの実践方法の把握と実行力	1	2	3	4	5

附問 1：現在、Ⅳ群が表す内容の関連科目教育に携わっていますか？

→ 1) 携わっている 2) 携わっていない

附問 2: IV群の項目のコア・カリキュラムとしての妥当性についてご意見を自由にお書き下さい。

V 群 実践環境に対応したソーシャルワーク実践能力

【V群の到達目標】 実践の場の特質、関係する機関・人々との協働に関して 理解し、実践を展開できる能力を習得する。	全く 妥当では ない	あまり 妥当では ない	どちら とも言え ない	まあ 妥当であ る	非常 に妥当で ある
1. 多様な実践の場の理解と場にふさわしいソーシャルワーク 実践能力	1	2	3	4	5
① ソーシャルワーク実践の場の（種別の）理解と実践方法の 把握	1	2	3	4	5
② （各）実践の場の組織構造特性（の把握）	1	2	3	4	5
③ （各）組織構造におけるソーシャルワーカーの位置・地位と 実践の特徴（の把握）	1	2	3	4	5
2. 他職種・機関と連携できるソーシャルワーク展開能力	1	2	3	4	5
① 連携・協働・チームアプローチ・ネットワーキング概念の 把握と実践方法の理解と実行（力）	1	2	3	4	5
② （各）施設・機関における組織内（多）職種構成とその連携の実 態の把握	1	2	3	4	5
③ （各）施設・機関の組織外（多）施設・機関の構成とその連携の 実態の把握	1	2	3	4	5

附問 1：現在、V群が表す内容の関連科目教育に携わっていますか？

→ 1) 携わっている 2) 携わっていない

附問 2: V群の項目のコア・カリキュラムとしての妥当性についてご意見を自由にお書き下さい。

VI群 実践の中で研鑽・研究できる能力

【VI群の到達目標】 最善・最新情報収集、自己研鑽、研究等、個人的ソーシャルワーク能力の維持・向上及び、社会福祉学とソーシャルワークの発展に寄与する能力を習得する。	全く 妥当では ない	あまり 妥当では ない	どちら とも言え ない	まあ 妥当であ る	非常 に妥当 である
1. ソーシャルワーク実践に関わる情報活用能力	1	2	3	4	5
① 情報活用に係る情報リテラシーの理解と実行力 (情報源・アクセス法・情報機器媒体の活用)	1	2	3	4	5
② 情報の比較対照・検討能力	1	2	3	4	5
③ プレゼンテーション能力	1	2	3	4	5
2. ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め、研究できる能力	1	2	3	4	5
① 実践水準の概念及び実践水準の把握方法の理解	1	2	3	4	5
② 自己研鑽・外部研鑽（研修・講習会）機会の活用	1	2	3	4	5
③ 研究の理解と研究手続き・手順の把握と実行力	1	2	3	4	5

附問 1：現在、VI群が表す内容の関連科目教育に携わっていますか？

→ 1) 携わっている 2) 携わっていない

附問 2：VI群の項目のコア・カリキュラムとしての妥当性についてご意見を自由にお書き下さい。

★ 最後に、コア・カリキュラム（案）全体に対するご意見を自由にお書きください。

～～ 以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。～～

社会福祉系モデル・コア・カリキュラム

I 群 社会福祉学

【I 群の到達目標】

ソーシャルワークを展開するための基盤として、社会福祉学の概念定義、関連する制度政策、歴史事象を説明できる能力を習得する。

I 群 1 社会福祉概念の定義・内包・外延およびその概念に関する理論的立場を説明する能力

項目	細項目
1. 社会福祉の理念 <達成目標> 社会福祉の理念と理念に影響を与える要素について説明できる。	①理念の変遷 ②現代的な理念 ③現代的な課題
2. 社会保障・社会福祉の位置づけ <達成目標> 社会・市場・社会政策等社会福祉の外延にあるものと社会福祉との関連性を説明できる。	①社会と社会福祉の関連 ②市場と社会福祉の関連 ③社会政策としての社会福祉 ④社会保障、社会保険と社会福祉の関連
3. 社会福祉学一般理論・原理論 <達成目標> 社会福祉学の一般難理論・原理論・福祉国家のタイプについて説明できる。	①一般理論・原理論 ②福祉国家のタイプ
4. 社会福祉の主要概念 <達成目標> 社会福祉制度を方向づける主要な概念を説明できる。	①社会福祉のあり方に関する概念 ②社会福祉制度の意義に関する概念 ③社会福祉制度設計に関する概念
5. 社会福祉における実践主体 <達成目標> 社会福祉の実践主体について説明できる。	①社会福祉実践主体に関する概念 ②社会福祉専門職に関する概念

I 群2 社会福祉制度・政策領域：社会福祉概念で構成される社会事象及びその事象を産み出す諸要因を表示するものを説明する能力

項目	細項目
1. 社会福祉制度の概念 ＜達成目標＞ 「制度」概念の理解の下に、社会保障制度や他の社会制度との関連において、制度としての社会福祉の諸特徴を説明できる。	①「制度」の概念 ②社会保障制度概念との関連 ③他の社会制度との関連
2. 社会福祉関連法 ＜達成目標＞ 社会福祉の法体系を憲法・社会福祉法・分野法の体系として把握し、法とその執行の仕組みを説明できる。	①法体系の構造 ②法・政令・省令・通達・通知・告示の構造 ③法と条例
3. 社会福祉制度を生み出す仕組み・要因 ＜達成目標＞ 社会福祉制度を国及び地方レベルで生み出す行政の組織・機構・機能を理解すると共にその行政へ影響を与える社会勢力のあり様を説明できる。	①国家と政府と行政 ②国家と地方公共団体及び地方分権 ③国家政治と地方政治 ④社会福祉政策 ⑤福祉行政と福祉財政 ⑥福祉関連訴訟・不服申立制度 ⑦社会福祉運動・市民運動 ⑧ソーシャルアクション
4. 非公的セクターの意義と仕組み及び機能 ＜達成目標＞ 社会福祉の行政という公的セクターに対抗・協働・独自性をもって活動する非公的セクターの存在意義を理解し、その諸形態と特徴を説明できる。	①第三セクター ②民間セクター ③NPO法人 ④インフォーマル・セクター ⑤ヴォランティア・セクター ⑥民営化、民間委託
5. 国際的側面（国内社会保・社会福祉への影響要因） ＜達成目標＞ 我が国の社会福祉のあり方や方向性に影響を与える国際的動向を理解し説明できる。	①国連・権利条約 ②国際政治と社会保障・人間の安全保障 ③OECD ④外国人労働者

I 群3 社会福祉概念で包摂される歴史的事象を伝え得るものを説明する能力

項目	細項目
1. 社会福祉において「歴史」を学ぶ意義の把握 ＜達成目標＞ 歴史に関する基礎的、かつ包括的な理解を下に、社会福祉の歴史と他領域との関連について説明できる。	①歴史とは何か ②現代を理解・把握するために、現代を生み出してきたものとしての歴史 ③発達段階として歴史と進歩史観 ④歴史における「時代区分」の意味と実際の区別 ⑤社会福祉の歴史と他領域との関連
2. 現代の社会福祉を理解・把握するための視点からの逆照射 ＜達成目標＞ 貧困・悲惨、差別と排除の背景基盤の理解の下に歴史における現代の動向を説明できる。	①富・資源・所得の再配分とその背景基盤としての貧困・悲惨 ②承認の平等と、その背景基盤としての差別と排除 ③歴史における現代の動向

Ⅱ群 社会福祉専門職の基本に関わる実践能力

【Ⅱ群の到達目標】

社会福祉専門職の基本的態度・姿勢（尊厳の尊重、自己決定、社会正義）を理解し、実践を展開できる能力を習得する。

項目	細項目
1. 人の尊厳と人権擁護を基本に据えた実践能力 <達成目標> 社会福祉専門職の最も基本的な価値理念である基本的人権をめぐる諸概念を理解し説明できる。	①基本的人権概念の把握 ②人権侵害概念と侵害状況の把握 ③人権擁護概念と擁護方法の把握
2. 利用者の意思決定を支援する実践能力 <達成目標> 主体としての利用者が自ら意思決定できるように基本概念を理解して支援することができる。	①利用者の意思決定という概念の意味と意義の理解 ②権利としての意思決定の法的、倫理的根拠 ③意思決定の前提としての「能力論」と能力支援の意味と方法
3. 社会正義に基づいて広範な視野を有する実践能力 <達成目標> 人と社会のあり方を律する最も基本的概念である社会正義を把握し、それに基づいて視野を広げた実践ができる。	①正義及び社会正義の概念の把握 ②正義の下位概念の把握：自由・平等に関する理解 ③反正義状況の把握（世界の悲惨）

Ⅲ群 理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力

【Ⅲ群の到達目標】

実践モデル、支援の対象レベルの特質、介入レパートリーを理解し、計画的に実践を展開できる能力を習得する。

項目	細項目
1. ソーシャルワークの理論やソーシャルワーク実践モデルを駆使したソーシャルワーク展開能力 <達成目標> ソーシャルワーク理論の歴史的発達の社会的背景と意義を理解し、説明することができる。	①ソーシャルワークの一般モデル ②ソーシャルワーク理論の歴史 ③ソーシャルワークの実践モデル／アプローチ ④ソーシャルワークの一般的展開（過程）モデル
2. 対象のレベル（個人・家族・集団・組織・地域・制度など）に対応したソーシャルワーク実践能力 <達成目標> ソーシャルワークの対象のレベルがミクロからメゾ、マクロに及ぶことを理解し、各レベルの特性に応じた知識と技術を用いて実践をすることができる。	①ソーシャルワークの対象レベルの捉え方：ミクロ-メゾ-マクロ ②各レベルの対象特性の把握 ③レベル特性に対応するソーシャルワーク技術特性の把握
3. ソーシャルワーク基本技術群及び多様な介入レパートリーを有した確実な実践能力 <達成目標> ソーシャルワークの方法が直接・間接・関連援助技術から成ることを体系的に理解し、多様な援助技術を状況に合わせて使用することができる。	①ソーシャルワークの基本技術の把握と実行力 ②ソーシャルワークの「方法」概念 ③関連技術群の把握と実行力

Ⅳ群 多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力

【Ⅳ群の到達目標】

多様な問題群及び問題出現の機序、生活概念及びニーズ概念、発達段階を理解し、実践を展開できる能力を習得する。

項目	細項目
1. 社会福祉の対象とその変化に対応したソーシャルワーク展開能力 ＜達成目標＞ 社会福祉の対象の概要と時代による変遷および対象論と福祉制度との位置関係における理解に基づき、ソーシャルワークを展開できる。	①社会福祉における対象の理解 ②対象の変遷への理解 ③時代区分と対象論 ④福祉制度論と「対象論」の位置関係の把握
2. 人間の発達段階を理解しそれに対応した多様なソーシャルワーク展開能力 ＜達成目標＞ 人間の発達段階を理解し、それらの概念を活用しながら、多様なソーシャルワークを展開できる。	①ライフサイクル・ライフコース・ライフステージ・生涯発達等の概念の把握 ②発達課題・生活課題概念と、課題分析の方法と理解 ③ライフイベント概念の把握
3. 問題群に対応した多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力 ＜達成目標＞ 伝統的問題群および新しい問題群の特徴を理解し、それぞれに対応する方法を活用しながらソーシャルワークを展開できる。	①伝統的問題群（貧困・疾病・家族関係・扶養・ケア・住宅・生活環境等々）の理解と対応法（対応制度も含む）の把握 ②新問題群（労働・格差・犯罪・虐待・多文化・多人種等々）の理解と対応法（対応制度も含む）の把握
4. 対象が生み出される仕組みへの理解に基づく、利用者に適した理論的アプローチによるソーシャルワーク展開能力 ＜達成目標＞ 社会福祉の対象認識に基づき、対象が生み出された仕組みを理解することによって、それぞれの対象に適したアプローチを展開することができる。	①支援の対象となる分野（問題群）を理解する ②伝統的問題群（貧困・疾病・家族関係・扶養・ケア・住宅・生活環境等々）および新問題群（労働・格差・犯罪・虐待・多文化・多人種等々）にある利用者に対応するための理論的アプローチの把握 ③社会福祉における利用者および対象認識
5. 多様な生活の場に対応したソーシャルワーク展開能力 ＜達成目標＞ 利用者にとって多様な生活の場の意味を理解し、その場に適したソーシャルワークの実践方法を展開できる。	①生活における居住環境と各環境の生活の構造の把握 ②生活における転居・移動・移行の概念と実態の把握 ③生活の場（地域・在宅・施設・中間形態）に応じたソーシャルワークの実践方法の把握と実行力

V 群 実践環境に対応したソーシャルワーク実践能力

【V 群の到達目標】

実践の場の特質、関係する機関・人々との協働に関して理解し、実践を展開できる能力を習得する。

項目	細項目
1. 多様な実践の場の理解と場にふさわしいソーシャルワーク実践能力 <達成目標> ソーシャルワークの多様な実践の場を理解し、その場の組織特性に応じた実践を展開できる。	①ソーシャルワーク実践の場の（種別の）理解と実践方法の把握 ②（各）実践の場の組織構造特性の把握 ③（各）組織構造におけるソーシャルワーカーの位置・地位と実践の特徴の把握
2. 他職種・機関と連携できるソーシャルワーク展開能力 <達成目標> 他職種・機関との連携の必然性を理解し、そのチームの中での的確な役割をもって実践できる。	①連携・協働・チームアプローチ・ネットワーキング概念の把握と実践方法の理解と実行（力） ②（各）施設・機関における組織内（多）職種構成とその連携の実態の把握 ③（各）施設・機関の組織外（多）施設・機関の構成とその連携の実態の把握

VI 群 実践の中で研鑽・研究できる能力

【VI 群の到達目標】

最善・最新情報収集、自己研鑽、研究等、個人的ソーシャルワーク能力の維持・向上及び、社会福祉学とソーシャルワークの発展に寄与する能力を習得する。

項目	細項目
1. ソーシャルワーク実践に関わる情報活用能力 <達成目標> 社会調査等の研究計画と調査用紙の作成、データ収集、データ入力、データ分析、研究報告、研究発表ができる。	①情報活用に係る情報リテラシーの理解と実行力（情報源・アクセス法・情報機器媒体の活用） ②情報の比較対照・検討能力 ③プレゼンテーション能力
2. ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め、研究できる能力 <達成目標> ソーシャルワーク実践に関し、量的・質的評価、効果測定等を行い、研究会、学会等に参加し、研究する能力を育む。	①実践水準の概念及び実践水準の把握方法の理解 ②自己研鑽・外部研鑽（研修・講習会）機会の活用 ③研究の理解と研究手続き・手順の把握と実効力